

マータイさんの死

ケニアの環境活動家、ワンガリ・マータイさんが亡くなりました。71歳でした。

彼女は、2004年に環境保護活動家としてノーベル平和賞を受賞しています。環境保護活動家としてはもとより、アフリカ人女性としても史上初の快挙でした。

また彼女は、日本の「もったいない」精神に感銘し、「MOTTAINAI」という言葉と共に、環境保護の大切さを世界中に訴えたことでも知られています。

彼女に対するノーベル賞は、彼女が1977年以来取り組んできた「グリーンベルト」運動の実績が評価され与えられたものですが、この「グリーンベルト」運動は、植林活動を通じて、女性の社会参加や民主化、持続可能な開発を進めようとするもので、母国ケニアから始まり、アフリカ全土にその運動の輪を広げてきました。

ケニアは、1963年に独立しますが、換金商品食物であるコーヒー栽培などのために森林伐採が進み、日々の薪にも事欠く有様となったといわれます。薪探しは女性の仕事だったそうで、森林の荒廃は、女性に対しても大きな負担を強いることになりました。マータイさんは、こうした現状を改善するため、女性による植樹活動として「グリーンベルト」運動を始めることになりました。しかし、この運動は、前政権が進めていた開発事業への反対運動や民主化運動とも連動していったため、厳しい弾圧を受け、彼女自身、何度も投獄されていますが、マータイさんの人を包み込むような優しく、暖かな表情からは、そうした事を感じさせません。しかし、ケニアのキバキ大統領は、28日声明を発表し、29日と30日の2日間、国を挙げて喪に服すると共に、マータイさんの葬儀を国葬とすることを明らかにしているように、新しいケニアを象徴するような存在だったのではないかと考えています。

アフリカは、経済発展のために資源開発が進められる一方、その開発によって国土が荒れ果て、砂漠化が一層進み、新たな食糧難や貧困を生み出すという、悲しい現実があります。グローバルな経済環境に巻き込まれる中で、開発か保護かを選択せざるを得ないとすれば不幸なことです。マータイさんは、これに歯止めを掛け、開発と保護の調和を目指したのではないのでしょうか。だからこそ、彼女が2005年に来日された際、日本人の「もったいない」精神にいたく共感されたのだと思います。

「もったいない」は、物の本来あるべき姿がなくなるのを惜しみ、嘆く気持ちを表しています。「MOTTAINAI」は、今となっては、限りある自然を大切にし、再生可能な社会をつくろうという、マータイさんの遺言とって良いかも知れません。

3・11の東日本大震災の折の被災地の方々の抑制の聞いた態度に、世界の人々が感動しました。日本人の持っている心延（こころばえ）は、世界の人から見直されようとしています。

この素晴らしい精神文化を持っているお膝元の日本が、豊かな生活の中で、いつしか「もったいない」精神を彼女にいわれるまで忘れてしまっていた気さえします。

3・11を経験した私たちは、日々の生活の中で節約という言葉を噛みしめています。改めて、「もったいない」精神に立ち返っていくことが必要だと感じているのです。（塾頭 吉田 洋一）